

令和三年十一月一日発行
清原二七号(毎月一回)白鳥社

京鹿子

11月号

鈴鹿 呂仁
拾掬集 その七十四



引く波へ青夜の契り常しえに
青き夜や祈りの島の天主堂
一頭の蝶へ手招き藤袴
ふじばかま風白きゆゑ恋をする
鬼の子や乖離の民を拾ふ街
がちやがちやの庭に忘れし玩具箱

鴟猛る無げの遊みの宝くじ
有り顔に手足擦り寄す秋の蜂
障子洗ふ言はぬが花の嘘まこと

吟行梨木神社・御所

紅萩の風にこぼるる崩し文字
神に問ふもみづる萩の初心かな
巫女に問ふ二言三言萩吉よごと事
恋の句に付かず離れず萩の蝶
萩こぼる吐息をひとつ拾ふ蝶

近詠

和田 照海

水海月

落ち潮の忘れてゐたる水海月
伊予灘のさし潮すでに涼新た
秋海棠疎遠諾ふよしもなく
長考の一手白露の澄みゆけり
牛小屋の蚊を焼き母の夕仕度



近詠

松本 鷹根

馬肥ゆる

馬肥ゆる離島岬の風戦ぎ
雲間陽の射し込む窓に秋気あり
落鮎や時季の流れと届けらる
神苑に詫びの尽くしの新松子
草の花手を振り別る流れ橋



—近詠—

塩貝 朱千



柱時計

童話絵のあはあは萩の咲き初むる
柱時計ぽんと昭和へをみなへし
曼珠沙華遙けき父母として手折る
別れ唄鼻でうたつて夜の長し
マロニエの枯葉のほふ旅心

英華採集

落蟬や命のぬくみ日にかへす

福山 三輪 桜花

蟬の寿命は、地上では俗に一〜二週間と言われるが、長いものでは一カ月を超えるものもいる。幼虫の地中生活の期間も三年以上十年以上の研究結果もあるようなので昆虫としては長い。しかし、俳句の世界では、蟬は短命であり命の儚さもよく詠まれているところである。掲句は、人にとつては厳しい夏の日差しが精一杯エネルギーに変えている蟬の生命線であり、正に「命のぬくみ」である。蟬の命の終焉を表す下五の納まり方が良い。

西瓜割る地球のどこか罅入る

堺 辻 量子

ここ最近、核家族の家庭が増え西瓜もスーパー等で二等分、四等分あるいは八等分の切り身状態で買われ丸一個を買うことは少ないだろうが、皆で食べる西瓜は、夏の一家団欒の象徴のような絵が出来上がる。この平和を匂わせる西瓜を割れば、地球のどこかに罅が入るといふ突拍子もない発想は単なる面白さだけではなく社会へ警鐘を鳴らす一句と捉えれば納得する。地球上では、国同士の領土権争いの紛争そしてここ二年のコロナ禍の問題等罅だらけの状態を示唆している。

グリコキャラメル両手広げてトンボ追ふ

福知山 藤本 孝子

我々の子供の頃も含めて根強い人気を博しているグリコのキャラメル。キャラメル自体の美味しさも然る事ながら確かオマケの小さな「おもちゃ」が付いていたような記憶がある。江崎グリコの創業理念は「食べながら遊び、遊びながら食べる」だそうで、どちらか一方では満足しない子供の世界を作り出している。掲句の「トンボ追ふ」は正しく理に適っている。道頓堀の「グリコサイン」は大阪南のシンボルだが両手を広げて夢を追いかけているのであろうか？

帰り花 沼田巴字

飛ぶ鳥の羽搏く音や神の旅
自由自在に遊ぶ園児や初しぐれ
山頂に軋むケール初時雨
あらぬ方より母の声あり帰り花
盲者には点字といふもの散紅葉

今朝の秋 植村蘇星

石鹼の匂ひほのかな今朝の秋
秋蝶の影のうすれし着地かな
造形美 棚田百選豊の秋
深む秋吾に晩年無かりけり
と見かう見俳百景の大枯野

万国旗 高木晶子

万国旗ここに吊るそう蜘蛛の糸
今どきの西瓜希みの種三つ
北斎の線を上塗り台風波
台風余波屋並等しく色を消す
月高くしていささかの余命あり

ゆりの供花 伊藤希眸

人間か人か八月艦を漕ぎぬ
わくら葉散る軀躰のいたみ陽にさらし
秋来ると風の知らせる岬かな
戦後七十六年シュールな厨夫逝きぬ
床の間に伝来の太刀ゆりの供花

夏の果て 北川孝子

昨日今日明日に賭ける爽気かな
シロホンの音は水色夏の果て
大原女に知りあいひとり夏終る
一つ灯にひとりの暮し夏の果て
自己流のしあわせに足り夏の果て

香水 直江裕子

盆地といふ大きな絵皿杏咲く
海を見たくてさるとりいばらまたこぼる
花楓羽あるものに手をかざす
香水ではかるそれとは分かる距離
語らねばならぬことある五月三日

放 下 奥田筆子

北斎の樽の中なる富士開き
跳躍や晩夏の鯉の放下とも
どくだみやドミノ倒しの予定表
からすうり浪の音させ裏戸より
返り血をほたるぶくろに封印す

勤労感謝の日 井上菜摘子

空席は埋めなくていい冬日置く
柞紅葉すこしの見栄に生かされて
雁渡し父の本心つひぞ知らず
釘抜いてもらふ勤労感謝の日
まだのぼる階のあり冬紅葉

神麓集

近松忌 村田あを衣

身の丈を風に計りし秋の蝶
晩秋の逃げ足早き影を追ふ
雑念に蓋を蓑虫蓑ごもり
近松忌からくれなゐの糸からむ
喪歸りの重心正す落葉径

ペンギンの行進 山中志津子

ペンネーム巢の小燕に付けてやる
ペンギンの行進いつきに梅雨明るる
心太掴みどころの無き話
早瀬戸を見下ろす燈台夏深む
試歩止めて朝を満喫胡麻の花

蝉しぐれ 井尻妙子

蝉しぐれはや七年の師の忌日
噴水の穂先に畳む四連休
赤とんぼ電池仕掛けの子の玩具
茄子の馬本家分家の穏やかに
蝉しぐれ百花の園に百の木々

浄土色 鷺山珀眉

蔦茂る紆余曲折の一途なる
アスファルトを転がつてゆく残暑かな
茄子の馬堂に地獄図極楽図
魂送り一番星の浄土いろ
秋暑し防犯ブザーこびりつく

生身魂 亀井福恵

宿六と呼ばれしがいま生身魂
枝豆の緑の沙汰を塩茹に
石榴熟れ真正直の痛みかな
はらからの円座三密ならぬ盆
満目の青田を統ぶる鷺一羽

夏の蝶 菊池和子

喝采のあとの静けさ夜の秋
駄句三つまあまあ二つ桃一つ
消えぬため翔ばねばならぬ夏の蝶
花木槿白を灯しの風語り
沖はるか夏をゆかせて返す波

稲の花 西村白仔

城の街播鉢ぞこの残暑かな
夫翳は若きままなり茄子の馬
水音の走る千枚青田風
神の田のうすうす匂ふ稲の花
生涯の吾が勲章や登山杖

星月夜 安田優歌

かなかなや妣の夕影すきとほる
枕辺に降る星あつむ星月夜
蘭の香や小筥に妣の文二通
追憶の空は真青や赤とんぼ
醉芙蓉人を想へば紅深し

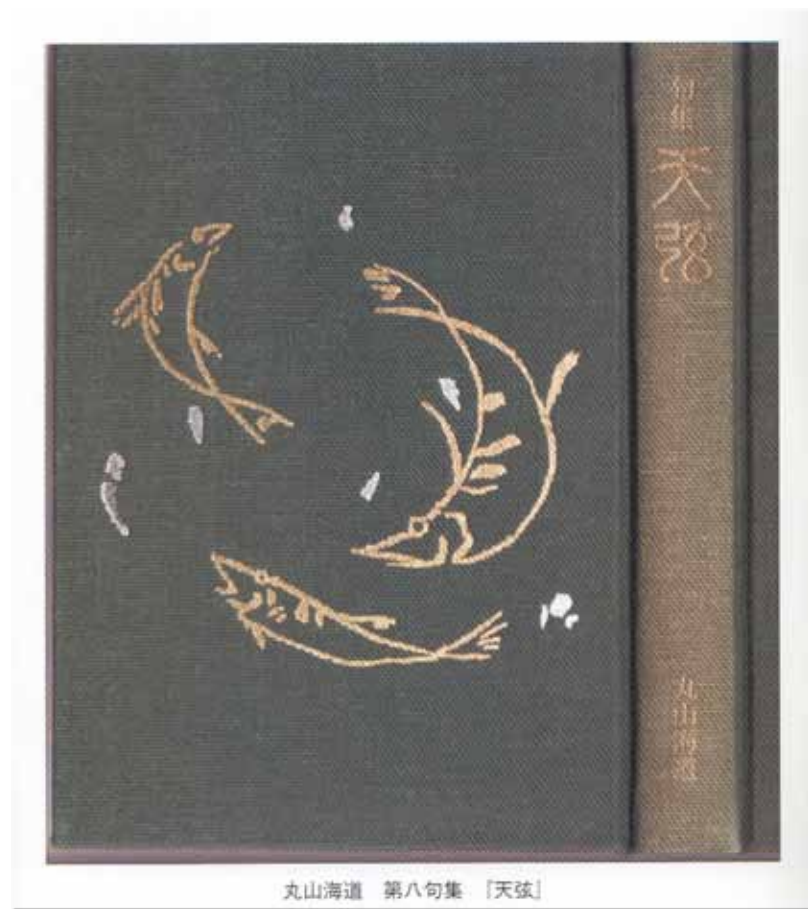
千年の木蔭

本郷公子

千年の木蔭に憩ふ蟬涼し
蟻地獄あちらこちらにある不穩
美少年に青きドナウや雲の峰
向日葵や見知らぬ里へ途中下車
黎明や影を正せる蓮百華

秋 蛩 石原孝人

追憶の時をさまよふ秋蛩
色足して足して故山の夕焼かな
かなかなの誘ふ道なき雑木山
海光を散らす残暑のぼんぼん船
風誘ひ風をころがす青田かな





京鹿子集

豊田都峰選

落蟬や命のぬくみ日にかへす

福山 三輪 桜花

とけてゆく記憶の海馬三尺寝

残暑見舞びつくり箱の富士の風
朝まだきりポピタン飲む秋暑かな

アヲチ 伊吹 之博

しんがりは殿と見受けり青蛙

遠き妻その先を行く白日傘

拾ひ読む朝刊蟬に急かされて

バナナ買ふミキサのある朝ごはん

西瓜割る地球のどこか罅入る

烏瓜ひとりふたりと親離れ

酒田 藤波 松山

朝顔の時を惜しまぬ夕べかな

土砂降りや何処に宿るつばくらめ

朝顔の蔓の気ままや反抗期

炎天下宅配便の忙しけり

桃剥くや家族の時間柔らかし

墓掃除帽子を飛ばす不意の風

グリコキャラメル両手広げてトンボ追ふ

福知山 藤本 孝子

心太酔ふほど心太くなり

母をのせ父の手綱の茄子の馬

ただ暑し寝ても起きても座つても

悔しさは次へのマグマ夏五輪

戸田 遠山 悟史

感染もメダルも最多夏日本

烏瓜の花姫の核なる蕊のあり

習志野 上野 紫泉

ウイルスの更なる進化秋立ちぬ

酔芙蓉夕日をためて落ちてゆく

八月の南の海や鎮魂歌

蝉ぢぢと遺風は無言風となる

八月や雲より降りるレクイエム

梅原ひろし

芒原ころげ新宿育ちかな

船橋 元橋 孝之

参道の日陰いただく墓参り

束の間の片道切符蓮の花

竹馬の友とびらを開く盃蘭盆会

墓所で会ふ月命日の夏の蝶

秋隣集中力の五輪かな

青柿や長男坊は生家出づ

ひまはりやパパを走らす三輪車

千葉 布川 孝子

向日葵を描きて安否を問ふ便り

丹羽 武正

イヤリング米寿の杯のソーダ水

病棟の窓辺向日葵咲き競ふ

風入れて二十五冊の大辞典

ガラガラのシャッター街や黴の色

星涼し窓に自粛と書いてみる

今朝もまた狭庭黙々草むしり

畑仕事蚊遣をさげて日暮れくる

市川 小島 正士

夏草の中に消えたりサヨナラ打

金子 正道

炎昼や鬼面となりて走り抜く

緑蔭に地図と帽子と握り飯

初めての手花火つまみ喋りだす

舌出して色を見せあふかき水

樽たたき晩夏やジャズとハイボール

お互ひに本音は言はずソーダ水

スマホ繰る得意不得意夕立来る

松戸 岡山 敦子

線香花火明るさ迄の旅終る

東京 岸上 道也

梅雨寒や部屋いっぱいビートルズ

西瓜切る黄色い月と子供の目

稲妻の走る一瞬闇分ける

つまくれなぬ昨夜の雨のひとしづく

黒き雲留まりてをり夕端居

生身魂ぼつんと座る小さき肩